

学部生が思う特別支援学校教員のスキル —学校見学を含むアクティブ・ラーニングを通して—

高橋真一郎*, 高原光恵**

本研究では本学の特別支援教育専修に在籍する学生が、入学初年度における特別支援学校への学校見学訪問やグループディスカッションなどのアクティブ・ラーニングを通して、どのような学びを得るのかを観察した。その結果、特別支援教育における「多様で柔軟な仕組み」の重要性や環境整備の配慮、教材教具の工夫、連携の重要性など多くの気づきが見られた。また、気づいたこと・重要だと思うことは、「教員のかかわり」、「コミュニケーション」、「幼児・児童・生徒のニーズに合わせた対応」、「各種連携」、「基礎的環境の整備」の5つのカテゴリーに大別された。さらには、同じ学びの場であっても個人個人で重視するものは違っており、学びの視点にも違いが出ることがわかった。それゆえ、積極的に知識、経験を共有できる場を設け、互いの認識を深めていくことを推奨するに至った。

〔キーワード〕：特別支援教育、特別支援学校教員、アクティブ・ラーニング、学生

1. はじめに

2007年に特別支援教育が開始され、その後様々な発展を見せてきた。2013年9月に文部科学省による学校教育法施行令の一部改訂や2014年1月の障害者の権利に関する条約への批准など、よりインクルーシブな教育システムの構築が目指されるようになった。インクルーシブ教育システムとは、人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とする目的の下、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組みである(中央教育審議会初等中等教育分科会, 2012)。

2016年4月からは障害者差別解消法が施行され、教育現場はもとより、教育の場以外でも合理的配慮の提供、基礎的環境の整備などが求められるようになった。さらには障害の重度・重複化もあり、結果として特別支援教育に携わる人員はより幅広い知識、経験が求められるようになってきている。また、近年のインクルーシブ教育への転換なども伴い、通常の学校、学級の教員も教育現場や研修の場などで個に応じた適切な対応について意識することが増えていると思われる。そのため、特別支援学校教員の志望者に限らず、将来、子どもに関わる職を志望する学生にとって、特別支援教育に関する学び・理解を深める機会は必須と言えるであろう。

大学教育においては、「学士課程教育の構築に向けて(審議のまとめ)」(中央教育審議会大学分科会, 2008)の中で指摘されているように、教育内容とともに教育方法の改善が提唱されている。推奨される具体的な取組のひとつとして、「学生の主体的な参画を促す授業方法」や「学内に止まらず、積極的に体験活動を取り入れ」ることなど、いわゆるアクティブ・ラーニングを指向した流れが生じている。

本学においても、授業科目によっては一方向的な講義形式が必要かつ適した場合もあるが、広くは、アクティブ・ラーニングの視点を踏まえた授業実施が推奨される傾向にある。特別支援教育の場で会う可能性のある子どもたちには豊かな多様性があり、その多様さを受容する人的・物理的環境が必要な子どもたちである。特別支援教育を指向し、それに関連した職を目指す学部生においては、知識の習得ももちろん大切であるが、まずは子どもたちに出会い、子どもたちの過ごす環境の実際を知ることにもまた重要であろう。そのため本学では特別支援教育を学び始めたばかりの学部1年次及び2年次において、体験的な学びを重視した科目も設定されている。こうした体験での学び、気づきについて明らかにすることは、学士課程における授業改善の方策としてだけでなく、特別支援教育分野に関心を持つ多くの後進にとって大学で学びを深めることへの期待を膨らませるきっかけにもなるであろう。

特別支援教育の更なる発展・転換の時期に、これから特別支援教育について学んでゆく学部1年次生

* 鳴門教育大学 学校教育学部 特別支援教育専修

** 鳴門教育大学 大学院 基礎・臨床系教育部

が、今現在どのような特別支援教育についての知見をもっているのかを把握することは重要である。そこで本研究では、特別支援学校を見学し、実際に特別支援教育が行われている場所での学びを通して、学生は特別支援学校の教員にとって必要なスキル等についてどのような気づきを得て、どう考えるのかについて考察することとした。

2. 目的

特別支援教育に携わろうと考える学生は、どのようなスキルや力が教員に求められると思うのか、学校見学及び学生間のグループディスカッションなどのアクティブ・ラーニングを通して学んだことを中心に、学部 1 年次の段階での気づき・意識を把握することを主な目的とする。

3. 方法

3.1 対象

本学の特別支援教育専修に在籍する学部 1 年次生 7 名を対象とした。

3.2 実施内容

徳島県内にある 4 校の特別支援学校を訪問見学する中で主体的に学ぶことを中心とし、1 校の見学につき、大学構内で事前学習の時間と事後指導の時間を設け、学生間での知識・経験の共有を行うこととした。全ての学校見学終了後、総括として全員でのディスカッション及び全体としての意見を整理するグループワークの時間を設けた。ディスカッションのテーマは、特別支援学校を見学して気づいたこと・思ったこと(通常の学校との共通点・相違点、教員はじめ子どもに関わる職業を目指すにあたって重要だと思ったことなど)である。

なお、学校訪問に関わるスケジュールは、表 1 の通りである。

表 1 実施スケジュール

| 時期 | 内容 |
|-------|-----------------|
| 4 月中旬 | 事前学習 |
| 4 月下旬 | 特別支援学校(知)見学 |
| 5 月上旬 | 事後指導 |
| 5 月中旬 | 事前学習 |
| 5 月下旬 | 特別支援学校(知・肢・病)見学 |
| 6 月上旬 | 事後指導 |
| 6 月上旬 | 事前学習(視・聴) |
| 6 月中旬 | 特別支援学校(視)見学 |
| 6 月下旬 | 特別支援学校(聴)見学 |
| 7 月上旬 | 事後指導(視・聴) |
| 7 月中旬 | 総括 |

4. 結果

学校見学及びディスカッションを通して引き出された学生の気づきは多岐に渡り、特に幼児・児童・生徒とのふれあいの時間や活動でのかかわりは心に残ることも多く、今後の学習意欲をさらに高めるものとなっていた。ただし本稿では、それぞれの学校全体の特徴として気づいたこと・重要だと思ったことに限定して、主な内容をまとめていくこととする。

はじめに「各学校見学で気づいたこと」、次に「全体的な気づき・重要な点についての Kategorization」、続いて「最も重視する Kategorization とその理由」について記載する。

4.1 各学校見学で気づいたこと

(1) 知的障害特別支援学校

最初の特別支援学校の見学は、特別支援教育 5 領域のうち知的障害のある児童生徒を対象とした学校であった。特別支援学校の教育課程は、知的障害を除く 4 障害では自立活動を加えているほかは、通常の教育に準じた枠組みを有しているのに対して、知的障害に関してのみ法令上も独自の教育課程の枠組みを認めている。この特別支援学校が最初の見学校であったことは、学生に特別支援教育における「多様で柔軟な仕組み」の重要性を意識づけたと考えられる。実際の見学では学校の設備や教員の対応などから各自で様々なことを感じ取った様子であった。また、教員一人あたりの児童生徒数を聞いて驚く様子なども見られた。「通常の学校では考えられない」や「予算はどうなっているのだろう」など、それぞれで疑問に思ったことがあったようで、その後その事柄について調べる学生もいた。また、教科の独自性に驚いたという意見もあった。特別支援学校学習指導要領では、知的障害者を対象とする場合、教科については枠組みの独自性のみならず目標及び内容についても独自に定めている(名古屋, 2015)。教科間の連携はもちろんのこと、その独自性、児童生徒に合わせた柔軟な対応などを見て、特別支援教育の専門性ということを改めて考える機会となった。

(2) 知的障害・肢体不自由・病弱特別支援学校

2 回目の見学先は主に知的障害・肢体不自由・病弱の 3 つの領域の特別支援学校であった。

この学校では、まず基礎的環境の整備についての気づきが多く挙げられた。特に四肢・体幹の運動機能に障害がある肢体不自由児への環境的な配慮が注目されていた。校内の手すりやスロープ、エレベーターをはじめ、他にも様々な支援機器の活用が学生

の目をひいた。ICTの活用については、1校目ですでにiPadなどのタブレット端末が使われており学生の中で意識されることはあったが、この学校での見学から、よりICT活用の重要性が意識された。特にICT機器による知的機能のエンハンスメントや身体機能やコミュニケーション機能の機能代替としての側面が意識されるようになった。また、医療機関や福祉機関との連携への関心も見られるようになった。個別の支援計画作成の際に理学療法士からの意見を頂くなどの連携について触れており、校外の専門家・専門機関との連携の大切さについて改めて学生の興味をひき、後のディスカッションでもよく話題に挙げられることとなった。

(3) 視覚支援学校

3・4回目には視覚支援学校と聴覚支援学校が併設される学校を訪問し、まず視覚支援学校から見学させていただいた。そこでの学生の気づきにおいては、前2校の場合と同様、教材教具についての言及が多く、関心を集めていたことが示された。ICT機器はもちろんのこと、身近にあるものを使って手作りされたものまでたくさんの工夫されたツールが気づいたこととして挙げられた。また、職業訓練の見学などから、就労についての関心も高められていた。特にあん摩マッサージ指圧師などの国家資格をとるための専攻課程やそこに关わる地域の人々との交流も含めて、就労への支援体制を構築していることが学生の印象に残ったようである。

(4) 聴覚支援学校

聴覚支援学校見学においても、教材教具、設備面での気づきが多く、関心が高かったことが示された。特に人工内耳や補聴器などへのそれが顕著であった。しかし、見学先での学びや学生同士の意見交換が進む中で、これらの設備や機器が使えない場面でのことも想定していかなければならないといった意見もあり、これらのものがなくてもコミュニケーションがとれるようにすることも支援の一つではないかという気づきも見られた。

4.2 気づき・重要な点についてのカテゴリー化

(1) 見学から学んだ気づき・重要点のカテゴリー化

全ての見学を終えた後、学生7名によるディスカッションが行われた。その際、大学教員2名が立ち会った。このディスカッションで得られた内容についてKJ法を用いてまとめることとした。「今回の全ての見学を通して気づいた点、重要だと思った点」に関する7名の自由回答について検討し、カテゴ

リー化した結果、自由回答は123ラベルに分割され5つのカテゴリーと13の下位カテゴリーに集約された。その全体像は図1の通りである。

(2) 各カテゴリー別の分析

1) 教員のかかわり

見学の際に印象に残った教員の対応や指導方針などが主に記述されていた。下位カテゴリーである様々なアプローチのなかには「スモールステップ」や「抽象的な質問より具体的な質問」などの記述があった。また、「子どもの苦手なところよりも、得意なことに注目する」ということに、学生は感銘を受けていた。他にも「あいさつうんどうなどで、児童生徒間でのコミュニケーションの活性化をはかる」といった、さりげない生活の中にも指導の意図が含まれていることに気づいた。

「勉強し続ける」とまとめられたところには「教員の研修」や「セミナー」などの記述があった。ICTの活用に関しては、5領域全てにわたり、多くの記述があった。特に聴覚障害に関する記述が多く存在した。

2) コミュニケーション

このカテゴリーでは「手話」や「口話」などの体を駆使したコミュニケーション方法に関する記載の他にも、iPadなどのタブレット端末のアプリなどによるコミュニケーション支援についての記述などが見られた。

3) 幼児児童生徒のニーズに合わせた対応

このカテゴリーでは「自立活動」や「個別の支援計画」に関する記述が多く見られた。見学の際にもこの分野にスポットライトが当てられることが多く、ほぼ全ての学生がこれについての記述をしていた。

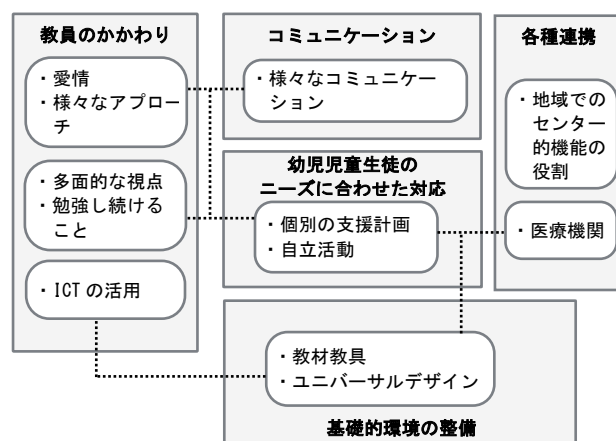


図1 学校見学により気づいたこと・重要と思ったこと

特に自立活動については学部生 7 人全員が記述していた。児童生徒に合わせた柔軟なカリキュラムの構築は特別支援教育において重要な事柄の一つである。

また、子どものニーズを的確に把握するために必要なものとしてコミュニケーションのカテゴリーとの関連性について指摘する学生もいた。

4) 各種連携

このカテゴリーに分類された自由回答が最も多かった。「外部の人も相談できる支援センターとしての役割」や「教育相談窓口の設置」など地域の中での役割や医療機関や福祉機関との連携についても記述されていた。また、学外だけでなく「教員同士の情報の共有」や「保護者との連携」など学内での連携も言及されていた。他学校との関連などにはまだあまりふれられていなかった。また、就労支援などでの地域との連携から自立活動や、ニーズに合わせた教育への関連についても指摘されていた。

5) 基礎的環境の整備

教材教具に関しては「点字本」や「iPad などのタブレット端末」、「子どもに合わせた自作の教材」など見学の中で見つけた様々な支援器具などもふくめ記述されていた。ICT 機器との関連も見られた。この ICT の活用に関してはアプリケーションの選択やアクセシビリティ機能などから、非常に高い関心が示されていた。また、学校、通学用バス、通学路などで見かけられた多くのユニバーサルデザインへ配慮した事物への関心が見受けられた。見学の際に初めて特別支援学校に行くという学生もいたため、特に設備面では初めて気づくことも多く、よく注目されていたようである。各学校で対応している障害種別が違うため、どのようなニーズに合わせて環境作りがなされているのか、関心が集まっていた。

4.3 最も重視するカテゴリーとその理由

総括での話し合いを進める中で、立ち会った教員から、ディスカッションで得られたカテゴリーの中でも、どの分野が最も重要と考えるかという発問があった。この発問に対する学部生の回答は一人一人異なっており、これについての意見の違いから学部生の考える特別支援学校の教員になるために必要なスキルの相違がみられた。以下にそれぞれのカテゴリーに関する意見を記載する。

(1) 幼児児童生徒のニーズに合わせた対応が最も重要だと考える学生の意見

文部科学省は、「特別支援教育」とは障害のある

幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うものと定めている(文部科学省, 2007)。これを受けて、この学部生は「特別な教育的ニーズ(SEN)のある子どもが必要な支援や配慮を受けられる教育の場」ということに重点をおいている。そのために、各種連携やコミュニケーションなどにカテゴライズされたものを使い、合理的配慮を提供するのが望ましいというのがこの学生の意見である。目標に関しても、個々で設定されるものであり、自立の程度や度合も変わってくると考えており、特別支援教育においては個々の特別な教育的ニーズの発見が重要であると考えていた。

(2) 教員のかかわりが最も重要だと考える学生の意見

このカテゴリーを選択した学生の 1 人は、教員のかかわり方、中でも「愛情」が重要だと主張した。かつて大村はま(2004)は「熱心と愛情、それだけでやれることは、教育の世界にはないんです。」といった。確かに、それだけでは教育はできないであろう。しかし、逆にそれがなければ教育はできないというのもまた事実である。この学生は「支援などの前に対象となる児童生徒を一人の人間として愛することが必要」だと主張した。そして、それが理解につながるとも主張した。このほかのカテゴリーに分類されたものについてもすべて前提として「愛情」があるべきと主張し、それが重要であると考えていた。

(3) コミュニケーションが最も重要だと考える学生の意見

この学生は教員と幼児児童生徒間でのコミュニケーションが最も重要だと主張した。このコミュニケーションのカテゴリーには主にコミュニケーション支援に関する記述がされていた。豊富なコミュニケーションツールは子どものコミュニティや表現の幅を広げるだけでなく、教員が子どもの SEN を的確に把握することに役立つ。的確な支援にはまず、的確なコミュニケーションをとることが重要だと主張した。また、社会的な自立には他者とのコミュニケーションが重要になってくる。これらのことを受けて、この学生はコミュニケーションが最も重要であると主張した。

(4) 各種連携が最も重要だと考える学生の意見

特別支援教育で推奨されていることのひとつに校内外との連携がある。それは、校内外の教育機関同士の連携に限らず、医療や保健福祉、地域との連携、あるいは建築関係など、様々な分野との協力・協働が求められる状況がある。見学においても、実際に日々行われている教員同士・専門家同士の連携の実践やその必要性・重要性について学ぶ機会があった。こうした中で、このカテゴリーを選択した学生は、個人としてできることには限界があることを指摘した上で、他者／他機関と連携することにより、できる可能性が広がることへの期待を示した。

5. 考察

今回の対象となった学部生が1年次生ということもあり、多くの自由回答が得られた。普段から特別支援教育に携わる人にとっては当たり前を感じるかもしれない意見についても真剣に議論し、新たな答えを模索する様子がかがえた。その結果、見学やディスカッションを通して気づいた、学生が重要と思う観点・カテゴリーは「教員のかかわり」、「幼児児童生徒のニーズに合わせた対応」、「コミュニケーション」、「各種連携」、「基礎的環境の整備」の5つが見出されたこと、さらにそれらは互いに関連し合うものであることも明らかとなった。

全体としては、支援方法や支援体制を作ることに関する意見が多かった。特に各種連携についての意見は多く、医療機関や福祉機関との連携など、強く意識されるようになったようである。見学の際に見られた学生からの質問でも、支援の方法などに関するものが多く、学生の求めるスキルとして「支援体制を作る」、「多くの支援方法を知る」ということが主であるということがわかった。このことから、現段階で学生は、特別支援教育を学ぶうえで「支援体制の構築」に重きを置いていると推測される。そして、反対に支援のフェイディングに関する意見はあまり見られなかった。このことから、ひとつ危惧すべきことがある。それは「特別支援教育」と「介護」の混同である。「支援」の増築事態は決して悪いことではない。しかし、ただ支援をするだけではいけない。あくまで「教育」であるのだ。しっかりとした目標設定のもとで、必要な支援を適当に行うことが重要である。しかし、現段階では、まだ学生たちのなかで「目標」とするものが定まっていない。ディスカッションの中で示されていた考えから、現段階での学生の「目標」は大きく分けて二つに分類される。一つ目は生徒の社会的自立を重視したものである。ここでの自立に関しても学生間でいわゆる

想定している自立の程度が異なっている。しかし、幅はあるが共通していることがある。それは、「他者の助け」を前提としていることだ。それを権利だと考えるか、あくまで助け合いだと考えるかで意見は分かれたが、「一人で生きること」と、考える学生はいなかった。

もう一つの意見はQOLに重点をおいたものである。児童生徒の生活の質を高めるために支援を計画し、できるだけ本人の意向に沿って行うというものである。両意見の間では、将来の生活や就労など、様々な課題が存在するためどちらがよいともいえない状態であった。これらの問題は特別支援教育のみにおけるものではなく、全ての教育分野に通じるものがあると考えられる。実際に、学校現場における進路選択などでも同じような葛藤が見られるケースがある。特別支援学校においては、保護者の意見や希望が強くなってしまいう傾向があるので、特によく考えねばならない。

このように、同じ志をもつ学生の中でも根本にある考えの違いは多くあり、それぞれが重視することの違いがみてとれた。同じ目的の向かうものでも過程を重視するものや方法を重視するもの、結果を重視する者など、違いがあった。例として、結果4.3の(1)の学生の意見である「幼児児童生徒のもつ特別な教育的ニーズを知ることが最も重要なことなので、それを知るためにコミュニケーションを利用する」というものと、結果4.3の(3)における学生の意見である「コミュニケーションがとれなければ幼児児童生徒のもつ特別な教育的ニーズの把握が困難となるためコミュニケーションが最も重要である」というものの対比があげられる。同じものやお話を見聞きしても意見は収束することなく、むしろそれぞれの意見を確立し、それを深めるきっかけとなっているように感じた。

6. まとめと今後の課題

本研究を通して、学部1年次生の段階において、特別支援教育に携わる教員に必要なスキルについての考えにはかなり個人差があることがわかった。この考えの違いは決して悪いことではなく、今後の学生たちの学びをより深いものにしていくことになるだろう。本研究におけるディスカッションのなかでも学生一人一人がそれぞれ他の学生の意見を聴き、視野を広げる様子がかがえた。こうしたことから、今後も、積極的に学生が特別支援教育について議論する場が設けられることを推奨する。そして、今回得られた価値観の相違をふまえて、それらをまとめる力を養っていく必要がある。

謝辞

今後のさらなる学びにもつながる大変貴重な機会を与えてくださいました板野支援学校，徳島視覚支援学校，徳島聴覚支援学校，鳴門教育大学附属特別支援学校の教職員の皆様並びに幼児，児童，生徒の皆様にご心より感謝申し上げます。

本論文をまとめるにあたり，惜しみない協力をいただきました特別支援教育専修 1 年次生の皆様にご感謝申し上げます。また，本研究実施にあたり，貴重なご意見及びご指導をくださいました鳴門教育大学大学院特別支援教育専攻の田中淳一教授並びに津田芳見教授にご感謝申し上げます。

参考文献

- 大村はま(2004) 灯し続けることば，小学館。
- 中央教育審議会初等中等教育分科会(2012) 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)。
- 中央教育審議会大学分科会(2008) 学士課程教育の構築に向けて(まとめ)。
- 名古屋恒彦(2015) 「障害者の権利に関する条約」の下での知的障害教育教科，発達障害研究，37(3)，pp. 201-208。
- 文部科学省(2007) 特別支援教育の推進について(通知)，http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/n_c/07050101.htm (最終アクセス日：2017年1月19日)。